第９号

広報誌

INUYAMA-GAKU

犬山学

名鉄グループ犬山観光まちづくり戦略
　　～連携推進事業観光まちづくり講演会～
2021年度犬山学研究スタートアップ 研究報告
追悼　犬山学の先駆者　～横山住雄氏と犬山学～

西園寺公望別邸「坐漁荘」（博物館明治村内）から望む入鹿池

INUYAMA-GAKU | 2022.10 | 9th ISSUE

筆文字：犬山城白帝文庫 理事長 成瀬淳子

名古屋経済大学 犬山学研究センター

名鉄グループ犬山観光まちづくり戦略

開催日時：2022年4月24日（日）　場所：ホテルインディゴ犬山有楽苑

犬山市・犬山商工会議所・名古屋経済大学が共催し、連携推進事業観光まちづくり講演会を実施しました。講師に、名古屋鉄道株式会社 社長 髙﨑裕樹様をお迎えし、犬山市の観光まちづくりについてお話しいただきました。一部ではありますが、ご紹介します。

本日は会社としてだけではなく、個人的に犬山の観光まちづくりについて考えていることも交えてお話させていただきます。

一、深く：「本物を求めて」が原点

古い町並み、伝統的な建物は全国各地にあるが風景はどこも似ています。どこかで見たことがある、どこでも売っている、どこでも食べられるものをそろえるだけではいけないのです。観光というのはそこにある独自の光を観るものであり、ローカルなもの、地元の方が地元のものを提供することに来訪者は価値を求めています。観光地づくりを考えた時に、経済合理性を優先しチェーン店ばかり入れてしまうとどこも同じような商業エリアになってしまいます。つまり、外部を入れすぎてしまうと長期的に見たときに価値を下げて失敗してしまう危険性があります。

例えば、SNS受け、映え、のようなものばかり追っていくと中身が薄っぺらになってしまい、ブームで終わってしまいます。犬山城や国宝茶室如庵という二つの国宝がある犬山ですら、流行を追い続けるとそうなる危険があるのです。言葉は悪いけれど、観光客は大変移り気です。そこに注意し、コロナ後にやってくる国内観光の盛り上がり、インバウンドの次の大波を受け止める。あるいは攻めていく。犬山にしかない自然、歴史、文化的な資源がまだまだ沢山あります。それらを活かして、他にはないものをアピールすることが大切であり、ウケ狙いや流行りを真似るのは、できるだけ避けるべきではないかと思います。

当社では、犬山の観光事業戦略を立て、キーワードを「オーセンティックな観光都市」としています。「大人アガル犬山」というこれまでとは路線を変えたCMをご覧いただき、当社の考える犬山の新しい方向性を知っていただければと思います。

二、広く：点から線、そして面へ

２００７年から観光キャンペーンを実施し、皆さんと一緒に取り組んで15年ほど。犬山城に人が集まり、城下町には様々なお店が入り、平日も賑わうようになるなど、犬山城と犬山駅という大きな点を結ぶ線ができたのではないかと思います。しかし、現在はL字型で直線的に往復する「城下町」観光で完結しています。

個人的に観光まちづくり都市として好事例だと思うのは金沢です。シンボルの兼六園や繁華街の香林坊の周りにひがし茶屋街、主計町、近江町、武家屋敷、21世紀美術館などの個性ある所が集まっていて、バスやレンタサイクルで大半を周ることはできる。ただ1日では深く回れない、全部回りきれない、だから2日間、3日間、あるいはまた今度来る、というサイクルを生んでいます。

犬山であれば、城下町から少し広げ、市内の中心部全体を「まちなか観光」とし、犬山駅と犬山城の間だけでなく犬山遊園駅や犬山口駅から犬山城・城下町エリアに入る、多極ネットワーク型で回遊するルートを作り上げることが必要です。

さらに犬山城、城下町を中核にして、鵜沼宿、日本ライン、寂光院、桃太郎神社、モンキーパーク、リトルワールド、明治村、入鹿池と繋いで「犬山リング」を創るなど犬山の観光群を広く捉えてもいいと思います。

さらに広げて今度は地域観光の観点です。まずは周辺の市町との連携が必要で、そこからさらに沿線の市町を繋ぎたい。これを私は勝手に当社沿線の「こまち（Co-Machi）」観光と名付けていますが、これは関東と関西には無い、中部圏の特徴だと考えています。関東では東京という大きなまちがあり、個性あるまちが山手線の中に集中しています。関西は大阪、京都、神戸の三都、そして奈良の4つ大きなエリアの存在が極立ちます。中部には中小の個性的なまちがありますが、まだ全国的に知られていない。これから中小の都市が競いあって、磨きをかけることで、中部圏には「こまち（Co-Machi）」観光がある、と言えるようになると思います。その中で犬山は代表格であり、リード役です。そして、私は岐阜の出身で、愛着もあるのですが、岐阜は犬山と連携する最大のパートナーだと思うんです。手を組んで両市が盛り上がれば、ものすごく強いものになります。将来両市をつなぐ名鉄各務原線が観光路線になるのではないかと思っています。

さらに広域にいきます。観光学では、「ラケット理論」という考え方があります。ラケットの柄が長いほど、ラケットの面の部分が大きくなる。つまり、遠くから来るほど到着してから

の行動範囲は広くなる。そこをしっかり捉えていこうという考えです。次に来るインバウンドの大波に対して、私たちはしっかりと意識しないといけません。セントレアを入口とした中部圏での観光を考えたとき、ラケットの柄と面の結合点が犬山です。犬山発の着地型ツアーを企画して、岐阜、馬籠、妻籠、高山、白川郷、などに広がるように、拠点観光地としての役割を担える体制を整えていく必要があります。

三.長く：滞在型へ

現時点では犬山は日帰り型観光地です。今後、地元の方に愛されつつ、滞在型の観光地にしていくには犬山ならではの”個性あるもの”が”複数”なければいけません。滞在に二日以上かかる、夜を楽しめる、泊まりたくなる施設がある、というのがポイントです。目玉としては、犬山城と国宝の茶室如庵は、不動のもの。これにプラスして明治村です。明治村は一般的なテーマパークとは全く性質の異なる、唯一無二で、価値がものすごく高い。一般的には施設を作ると経年劣化するものですが、明治村は時間が経てば経つほど価値を上げる、不思議な施設です。さらに明治村と隣接する入鹿池、あの一帯の素晴らしい景観は他所にはなかなか無いです。この一帯を知的リゾート地に創造できないかと思っています。

次に夜。やはりナイトエンターテイメントは難しいんですね。どこのまちも苦労していますが、少しずつ始めるしかありません。ライトアップされた犬山城がホテルインディゴ犬山有楽苑の部屋からも綺麗に見えます。犬山のシンボルがライトップされているだけでも、ナイトエンターテイメントの一つになるのです。他にもロングラン花火は、短いながらも毎日花火が上がり、宵の明治村や、リトルワールドのワールドナイトフェスティバルには若い人達が集まっています。ホテルミュースタイル犬山エクスペリエンスで地元の方による体験イベントを開催することもナイトエンターテイメントになり得ると思っていまして、例えば犬山祭のカラクリをテーマに地元の方や、リトルワールドの外国人スタッフとの交流会があってもいいのではないでしょうか。夜景の綺麗なところは沢山ありますが、成田山からも見られることをもっとPRしてもよいと思います。他のまちと同様に、少しずつ育てていくことが大切なのだと思います。

ホテルインディゴ犬山有楽苑は、犬山観光の新しい時代を築くホテルになります。インディゴは滞在型観光事業を獲得する中心的な役割を担う、インターコンチネンタルホテルズグループのライフスタイル型のホテルです。国内にはまだ箱根強羅、軽井沢、犬山の3つしかありません。

コンセプトの「ネイバーフッドストーリー」は、地元の資源と繋がりを持って作り上げていくというもので、当ホテルで非常に大切にされています。単なる高級ホテル・おしゃれなホテルではなく、地元の人との繋がりがあるホテルです。その思いを地元の方々にぜひ知っていただくとともに、支えていただきたいと思います。

四、最後に：皆さんと一緒に考えたいアイデア

これは私の勝手なアイデアです。一つ目に手軽な山歩きです。全国あちこちに○○アルプスという名前がありますが、継尾山から鳩吹山を「日本ラインアルプス」と名付けてはどうでしょう。続いて二つ目、尾張富士と明治村からリトルワールドの東部丘陵地帯を併せたゾーンに、観光客に響く名前を皆さんでつけてもらえるといいなと思います。そして三つ目は犬山遊園駅でのアートプロジェクトです。桃太郎が有名ということで、例えばイヌ、サル、キジのジオラマを設置したり、影絵を投影したりするのはどうでしょう。鉄道の駅ですので制限はありますが、地元の方の意見を取り入れながら面白いことを考えてみたいです。

最後になりますが、犬山を「観光都市」ではなく、「観光文化都市」にしていきたいと思っています。観光で訪れるだけではなくて、宿泊・滞在したくなる、定住したくなる。知的で感性豊かで精神性に富んでいるまち。これが文化都市ではないかと捉えています。知識層、ハイセンスな人、文化人、そんな人たちに犬山に行きたい、泊まりたい、滞在したい、ずっと住み続けたい、と言われるまちにすることがこれからの観光まちづくり戦略の基本となります。

犬山観光はここインディゴのオープンで新しい時代に入りました。皆さんと一緒にオーセンティックな観光文化都市、「犬山」を作り上げたいと思っておりますので、今後とも名鉄グループをどうぞよろしくお願いいたします。

講師
名古屋鉄道株式会社　代表取締役社長
髙﨑 裕樹

西尾張地方・犬山市の食文化を取り入れた地域児童への食育活動方法の検討

名古屋経済大学人間生活科学部教授　　山田　貴史

本プロジェクトは、学生が主体となり、地域コミュニティーの子供たちへの食育活動を実施する事と、犬山の食文化を学ぶことをテーマとした取り組みです。管理栄養学科では、犬山市内のNPO法人ぽんぽこネットワークと連携し、そこに所属している児童といっしょに活動を行ってきました。これまでの取り組みでは、学生が年間を通して継続的にイベントを実行できる活動モデルの検討、学生が主体となって立案、計画、実施できる活動内容の検討を行い、ぽんぽこネットワークにて、児童との食べ物についての調べ物発表会や、クイズ会、調理イベントや、ぽんぽこネットワーク内の児童が他グループの児童を招いての子ども食堂の開催などを、年間を通して実施してきました。また、これらの取り組みの中で、犬山市にちなんだオリジナルのお菓子の考案や、犬山祭りや学園祭で自作したお菓子の販売にも挑戦しました。

これらの取り組みは、本学学生にとって非常によい経験になりましたが、他方、学生の感想として、食や栄養の情報など学生が事前に準備した内容を、児童に十分に伝える事ができなかった。あるいは、児童に対して、もっと色々な事を教えてあげたかったという内容があがりました。

そこで、2021年度の取り組み（本プロジェクトのテーマ）のひとつとして、犬山市の食文化について調査を行い、学生たち自身の西尾張地方・犬山の知識を増やすための取り組みを行いました。この取り組みでは、学生をいくつかのグループに分け、犬山市の特産品、伝統食を調べると同時に、その起源や歴史についてまとめ、グループ単位でのディスカッションを行いました。この取り組みによって、学生たち自身が、食文化の情報を人に伝える時に、その料理について調理法や栄養価を伝えるだけでなく、なぜその料理が生まれ、この地方に定着したかを合わせて説明する重要性を理解する事ができました。また、もう一つの取り組みとして、児童への食育方法についての、方法論やそれに関する文献を調べ、ディスカッションを行いました。これらの取り組みによって、食についての情報を効果的に児童に伝える方法について理解を深める事ができました。特に、児童は、大人と同じように食の経験があるわけではなく、情報の受け止め方も異なるため、実際に、見る、触るなど、五感を駆使した伝え方が必要である事を認識する事ができました。

これらの取り組みをもとに、児童に対する食育教材の作成、指導方法のディスカッションを重ね、次年度以降の児童とのイベントの開催準備を行っています。本プロジェクトの成果から、名古屋経済大学からの犬山食文化の発信方法の確立や、地域の食文化の教育方法の確立などへの発展が期待されます。

子ども食堂メニュー

学生によるメニュー考案の様子

「犬山学デジタルアーカイブ」プロトタイプの構築

名古屋経済大学図書館

名古屋経済大学図書館は2021年6月～ 2022年3月に犬山学研究スタートアップ支援を受け、「犬山学デジタルアーカイブ」プロトタイプ（試作版）の構築を試みました。

【目的・意義】

このアーカイブは愛知県犬山市とその周辺地域の郷土資料、貴重資料などをデジタル化してインターネットにより公開し、利用するすべての人の学習、研究、応用に役立て、地域の再認識と活性化、文化の発展に寄与することを目的としています。

プロトタイプを作成するにあたり、利用者が使いやすく、直感的に操作できる画面構成にすることが必要だと考え、他の図書館や機関が作成しているデジタルアーカイブを事前調査しました。それらを踏まえ、利用に重点を置いたデジタル化を行い、文献資料の面から「犬山学」を展開し、地域情報の発信による地域の再認識と活性化、小中学校における郷土学習や生涯学習での活用、体系的な「犬山学」への貢献を目指します。また、デジタルアーカイブの作成により、地域の文化遺産である郷土資料、貴重資料の保全を図り、後世に継承するによって文化に貢献することができます。（図1）

さらに、総合的な「犬山学デジタルアーカイブ」を事業として拡充することも目指しています。

【作成したデジタルアーカイブについて】

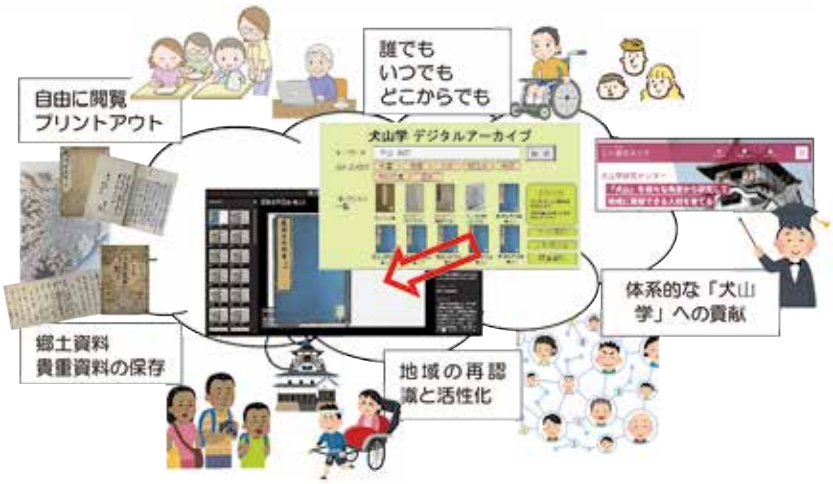
地域資料のデジタル化に造詣が深い業者との複数回の打ち合わせを経て、2021年10月に「犬山学デジタルアーカイブ」のプロトタイプ版（試作版）を作成しました（図2）。プロトタイプ版はトップ画面、アーカイブ種別画面、アーカイブ詳細画面の3階層構成とし、本学図書館が所蔵する資料を例として表示しております。サイト全体は犬山の自然の豊かさを表現したネイチャーカラーでまとめ、犬山城やイヌのイラストを用いました。なお、プロトタイプ版はサイト全体のイメージを掴むためのものに留め、実際の検索やアーカイブ資料の追加・編集等の機能は付随しておりません。

【今後の事業の継続・発展について】

作成したプロトタイプ版を元に一定の研究成果として現在は図書館業務システムのためのクラウドサーバーの一部を使用して、図書館ホームページ内にHTML形式のデジタルアーカイブ（http://wwwopac.nagoya-ku.ac.jp/InuyamaDA/InuyamaDA.html）を独自に公開しています（図3）。

〈犬山学デジタルアーカイブ〉

また、今後の事業の継続・発展として、デジタルアーカイブ等、画像表示するシステムの共通の国際規格であるIIIF（トリプル アイ エフ）の導入や国立国会図書館が運用している他機関が構築するデジタルアーカイブの横断検索ができるポータルサイト「ジャパンサーチ」との連携、犬山関係の資料を所蔵している関連機関との連携などを考えています。



（図1）

（図2）
「犬山学デジタルアーカイブ」プロトタイプ版

（図3）
「犬山学デジタルアーカイブ」仮称・試作版

追悼　犬山学の先駆者　～横山住雄氏と犬山学～

名古屋経済大学経営学部教授、犬山学研究センター長　　中村　真咲

2019年本学体験型プロジェクトで潜伏キリシタン史跡について説明する横山氏

尾張・美濃の郷土史の研究で大きな業績を残された横山住雄氏が、2021年3月11日に永眠されました。横山氏の業績と歩みについては、既に美濃地域の研究業績を中心に岐阜新聞に追悼記事（2021年5月5日号）が掲載されておりますので、本稿では横山氏の犬山を中心とする研究業績を振り返り、追悼に代えたいと思います。

横山氏は1945年に各務原市で生まれ、犬山市役所で勤務された後、行政書士事務所を開設するとともに、濃尾歴史文化研究所を主宰されました。横山氏は、犬山市役所在勤時から郷土史家として活躍され、地道な史料調査をもとに様々な仮説を提唱し、注目されました。

横山氏の研究を振り返ると、以下の三つの特徴があると考えます。第一に、膨大な史料を丹念に読み込み、新たな仮説を提示したことです。横山氏が読み込んだ史料には、通常の古文書のみならず、京都の寺に残る僧侶の語録、南朝・宗良親王の『新葉和歌集』など、これまであまり歴史史料として扱われてこなかったものが多く含まれていました。横山氏が導き出した仮説には説得力があり、多くの歴史家やNHK大河ドラマにも影響を与えました。

第二に、石仏・石塔を調べ歩いて石造文化財に刻まれた碑文を拓本にとり、その成果を踏まえて寺史を執筆するという地道な研究によって多くの寺から信頼され、さらなる史料調査につながるといったように、まさに横山氏は「歩く歴史家」でした。

第三に、横山氏の著作を読むと、尾張北部と美濃南部という境界線上の地域の歴史を取り上げながら、当該地域を超えて信州、駿河、甲斐、京、江戸などとの経済的・文化的な結びつきを明らかにするという、郷土史にとどまらない広い視野を持っていました。それは、横山氏が尾張北部と美濃南部という境界線上で生き、その境界線上で展開された歴史を見つめ続けてきたからこそ、到達できた視点だったのではないかと思います。

最後に、横山氏の犬山学への貢献について振り返ってみたいと思います。犬山に関わる横山氏の著作には、『犬山市の金石文』（石黒印刷、1970年）、『尾張と美濃のキリシタン』（中日出版社、1970年）、『犬山の歴史散歩』（自費出版、1989年）、『瑞泉寺史』（青龍山瑞泉寺、2009年）など多数の著作があり、上記の三つの特徴を垣間見ることができます。

また、私が本学の体験型プロジェクト『犬山の観光戦略を考える』の一環として、学生たちを連れて犬山周辺の潜伏キリシタン史跡を見学した際には、横山氏に五郎丸の万願寺跡や神明社、扶桑町の恵心庵などのキリシタン史跡をご案内頂きました。その際に、「なぜ、横山さんはキリシタン史跡を調査されたのですか？」と尋ねたところ、「ある日、突然、天啓を受けたようにキリシタン史跡を調査しなければならないと感じて、それから10年くらい無我夢中でキリシタン史跡を調査したんだ」とおっしゃっていたことを懐かしく思い出します。

横山氏の『尾張と美濃のキリシタン』を読むと、周辺住民へのインタビューやその後の開発で失われたキリシタン史跡など、その時でなければ書けなかったであろうことが多く記載されており、まさに「歩く歴史家」としての横山氏の面目躍如たるものがあります。

横山氏は、まさに「犬山学の先駆者」と呼ぶべき存在であり、横山氏が残された多くの研究業績を継承し、犬山学を発展させていくことが我々の使命であると考えます。ありがとうございました。

広報誌「犬山学」第9号　発行日：2022年10月20日　発行：名古屋経済大学 犬山学研究センター　〒484-8504 愛知県犬山市内久保61-1 TEL:0568-68-3282　FAX:0568-67-0724　MAIL:inuyamagaku-c@nagoya-ku.ac.jp